

グローバル社会における正義に関する一考察

：統一思想の観点から

(注は、訳省略につき、英語原本参照のこと)

野田啓介 Ph.D.
統一神学校 哲学準教授
アメリカ、ニューヨーク

要約

グローバル社会を迎えた現代世界において、正義の問題は幾多の急務に直面している。ことに人口増加、グローバリゼーション、ポストモダン現象は、いやおうもなく多くの課題を人類に課している。これらの諸現象は、その是非もあるのであるが、それ自体が避けることのできない状況として、その中で社会正義の問題を考えざるを得ない状況にある。統一思想が、グローバル社会において社会倫理を考えるとすれば、避けて通れない課題である。本論は、これらの課題への直接の解答、解決を目指すものではない。しかし、これらの課題を視野に入れないう限り、統一思想の正義論は空洞化してしまうと確信している。

1. 人口増加。この百年、人類史上またとなかった程、人口は急増し、その勢いはとどまるところがない。それに伴って生み出された工業化と環境への負荷の増大、経済性と環境保全の不均衡等の環境問題は、対処のいとまもないほどになっている。
2. グローバリゼーション。グローバリゼーションには、利点とマイナス面の二面性がある。しかし、今日のグローバリゼーションには、不公正なルール、非倫理的な仕組みがあることが多く指摘されている。しかし、世界的な統治のシステムがなく、それを監視するところも、訴えるところも、処罰するところもないまま、放置されているのが現状である。国家間においても、また国内においても見られる不公正な仕組みは、貧困と経済格差に拍車をかけている。
3. 現代社会は、近代以来の進歩の神話によって進んできた。しかし、環境問題（貧困の問題を含む）、マルクス主義の失敗は、進歩の神話、ひいては近代の思想的枠組みそのものへの不信感と疑義を投じている。ポストモダンと呼ばれる知的状況には、頼ることのできる思想の不在とそうした思想がある可能性への絶望感、不信感、疑義、相対主義があり、かかる思想的状況が、倫理学の構築する上で、さけられない状況を生み出している。

不公正なルール、非倫理的な仕組みは、最も弱いものに最大の重圧を与える。自然、女性、子供、そして国内においても、国際社会においても最も貧しい人々やグループは、代弁者もなく、かえりみる者もなく、無力で、放置されることになる。そして、実際にそうなっている。しかも、ポストモダンの思想状況は、画一的で普遍的な解決方法への絶望感に満ち、よりバランスのとれた、つまり普遍性をもちながらも、地域、人々、歴史、文化の特殊な状況に充分配慮した理論を求めている。統一思想が社会倫理を構築するには、かかる状況を避けて通る事は出来ない。

序 人間の本性と正義の可能性

『国家』第二巻(2.359a-2.360d)で、プラトンは、「ギゲスの指輪」の物語りを叙述している。普通の羊飼いが、ふとしたことで、自分の姿が見えなくなる魔法の指輪を手に入れる。すると、それまで善良にくらしていた羊飼いは、その力を得るやいなや、城に忍び込み、女王と通じ、女王とはかって王を殺し王権を手に入れる、という物語である。プラトンは、そこで人間が正義を遵守しているのは、法的制約があるからなのか等々、を問い、更に宗教倫理における主要課題である人間の肉欲との闘いの問題をも問うている。

この物語は社会正義に関わる現代的問題にもかかわっている。企業、社会組織、制度（国家、国際組織を含めて）が不正、不公正なルールや行為を施行していても、それが言わば「見えない」もしくは見え難いものとなっており、その事実は、正義な社会がどうあるべきかということに、大きな問いを投げかけている。

今日の政治的な正義の概念は、宗教的な価値を前提とはしていない。ジョン・ロールズは、政治的な正義の概念そのものは総合的な道徳の理論ではないことを指摘している。

「公正としての正義の概念は、政治的概念であり、社会の基本構造の特別なケースにあたるもので、それ自体は、総合的な道徳理論ではない。」

その限界の故に、政治的概念としての正義は、総合的な道徳理論、あるいは宗教的な道徳論の補完を必要とし、ロールズもその点を認めている。

「秩序ある社会を現実には造るためには、政治的な正義の概念の他に、総合的な、宗教的、哲学的、道徳的な教義が不可欠である。ことに、リベラルな民主主義にかんがみればなおさらのことである。」

宗教的、倫理的な補完が不可欠であるにしても、諸理論の教義的一致は困難であり、求めるべくもない。諸宗教が貢献しうるような自由を確保しつつも、社会のさまざまなグループが同意し、妥協しうるような、政治的概念としての正義もまた必要である。

統一思想の社会倫理は以下の諸点を前提としている。神は人類の父母であり、神はその愛のパートナーとして人を創造した。人間には霊的な側面と肉体的側面があり、死後、霊として永世する。人は他の為生きることを通して神の愛を身につけてゆく等々である。

I 社会正義論のコンテクスト：三つのチャレンジ

A. 人口増加

この百年における人口の急増は、いやおうもなく人類が直面している課題である。**1830**年には、人口は**10**億人であった。更に**10**億人が増えるのに、**100**年を要した。その後、**10**億人が増えるのに、わずか**15**年を待たず、次の**10**億人が増えるのに、**12**年を要さなかった。**2005**年には、**65**億人となり、毎年約**8**千万人増え続けている。人口増加そのものが正義、不正義の問題ではないが、人口増加が、貧困な発展途上国で著しく、しかも都市への人口流入をともなっており、都市のスラム化に拍車をかけているという現実を見過ごすことは出来ない。**2008**年には、全人口の半数以上にあたる**33**億が都市に集中し、**2030**年には、**50**億を上回る人が都市に住むと予想されている。このような都市への極度の人口集中は、人類史上いまだかつてなかった現象である。人口増加は、貧困、環境問題、女性、子供、健康、教育、雇用等の問題に深く関わっている。

人口増加そのものは、複雑な問題である。倫理的観点から見れば、自分の直接の家族のメンバーでない他人への責任があるのか、あるいはどこまであるのかという問いを投げかける。ほとんどの社会において、何人子供を生むかは、父母の決定、父母の自由意志にまかされている。しかし、社会は、その社会の中で生まれた子供は社会全体が責任を負うことが、前提とされている。例えば、ある夫婦が何人もの子供を産んだとする。その夫婦が、家族を養う能力がなかった場合、社会の全構成員に扶養の責任があり、福祉という形で責任を取るものとされている。個人は、どの程度、他人の家庭に生まれた子供に責任を負う義務があるのだろうか？人は、他の家庭に生まれた子供を、自分の子供を見るのと同程度の道徳的義務があるのだろうか？現実的には、責任の程度が異なるものとして、生活は営まれている。しかし、自分の子供を他人の子供より、よく見るということを倫理的に正当化するのはどういう理論的根拠に基づいているのだろうか？

統一倫理学は、全人類が神の子供であり、全人類が相互依存的に存在しているという存在論に立脚している。この理論からすると、父母がその子供全部に責任をもっているように、人類全体がひとつの家族として、神のもとにある共同体であることになる。家庭倫理である統一倫理は、そこから、社会的領域への責任論がうまれる。さらに、父母への孝行、共同体への忠義、世界に尽くす聖人、神に尽くす聖子等の、異なったレベルの徳目の相互関連を考察しながら、統一倫理学は、自由と責任、倫理的に正当化される行為の根拠と範囲を考察する必要に迫られる。個人が、なぜ、どのように、どの程度に、他人への責任を課せられるかが、考察される必要がある。それは人口問題も例外ではない。

B. グローバリゼーション

グローバリゼーションは、多大な功罪を同時にもたらしている。倫理的観点から見ると、現行のグローバリゼーションは、そのルール（誰がどのように、なぜそのように決めるのかを含め）、実践、統治のあり方に多大な問題をはらんでいる。2001年にノーベル経済学賞を受賞したジョセフ・ステルグリッツは、経済的グローバリゼーションの問題をこのように要約している：不公正なルールが、先進国の利益になるように決められている；経済的利益を最優先すること；自国の国民の社会福祉を改善しようとする発展途上国の試みを阻止する不公正なメカニズム；裕福な層と貧困層の格差が拡大していること；グローバリゼーションは、基本的に経済と文化における世界のアメリカ化に過ぎないこと。ステルグリッツは、自らの経験（1997年から2000年まで世界銀行でチーフエコノミスト、1993年から1997年まで、クリントン大統領の首席財政顧問）をふまえて、多くの著作の中で、IMF（国際通貨基金）、世界銀行、WTO（世界貿易機関）、多国籍企業、アメリカ政府の不公正なルール設定と実践を指摘している。金融から、貿易、バイオパイラシー（発展途上国で歴史的に行われた伝統的治療法を、米国内で製薬会社が特許をとることにより、その製法を独占すること）、製薬会社による著作権法を盾に取った独占等、多岐にわたって、具体的なケースをあげながら、氏は論述し、現今の経済的グローバリゼーションの中には、非倫理的で、不正なルールと決定プロセスがあると断言している。

「ゲームのルールは、先進工業国によって決定されてきた。とりわけ、特定の利益集団が、その利益を増加させるためにグローバリゼーションのあり方を決定してきたのである。公正なルールを設定することは眼中になく、まして、最貧国の人々の生活を改善するためのルールなど、全く考慮に入れることはないのである。」

グローバリゼーションは、多くの問題を投げかける。国家主権の限界と役割は何か。世界における公正な統治のあり方と意思決定、ルール決定の仕組みをどう作って行くのか。それを可能にする法制度と法の執行機関の設定をどうするか。経済的利益とその他の社会的価値のバランスをどうとってゆくのか等々である。少なくとも、その統治機構の透明性と公正性が不可欠である。

C. ポストモダン状況

1. マルクス主義及び発展、進歩への挑戦

19世紀から20世紀にかけて、マルクス主義は、貧困やそれに伴う社会悪から、人類を解放するメシア思想として登場した。マルクス主義は、哲学と、経済理論、歴史観をもった総合的な体系的な思想である。20世紀の後半になるにつれ、マルクス主義の内包していた諸問題が明らかになり、とりわけ経済の破綻、全体主義的独裁支配等が露呈した。その結果、知識人達は、マルクス主義のみならず、類似した傾向をもつ思想を敬遠するようになった。マルクス主義への絶望に加え、環境問題の露呈は、近代のパラダイムへの疑問を投げかけ、とりわけ近代の持つ「進歩の神話」に疑念を呈するようになった。世界的なグローバリゼーションは、世界的な大きな展望と多様な地域的な視野の両方から見る必要に迫られた。かかる現実が、ポストモダンと呼ばれる思想状況を生み出していった。

ポストモダニズムは、「大きな物語」へ懐疑的なスタンスをとる。「大きな物語り」というのは、マルクス主義に典型的に見られるような、ひとつの包括的理論で、全人類を救うというような理論である。ポストモダニズムというものは、そうした「大きな理論」、全てを包括し、説明する壮大な理論への懐疑的なスタンスである。更に、思想というものの根底に普遍の真理などの揺るがない「基礎」が存在するとか、哲学は、そこに「基礎付け」ることであるというような、「基礎付け主義」を拒否する。ポストモダニズムは、文化、宗教、思想、建築、その他多様な領域に見られる。そして、統一思想を含む哲学は、かかる思想状況の挑戦を看過することは出来ない。

II. 自己の利益と公共善：共有地の悲劇

ハーディンのよく知られた論文「共有地の悲劇」は、本来、人口増加と社会倫理に関する論文であるが、同時に、自己利益と公共善の拮抗をよくあらわし、これは環境問題とグローバリゼーションの問題をも描いている。概要は以下の通りである。

農夫が何人かいて、皆、共有地で羊を放牧していたとする。一人の農夫が羊を一匹増やすと、個人としての利益は増す。その羊は、共有の草を食べて、水を飲み、その負荷は全体に振り分けられる。もし、他の農夫が同じように、羊を一匹増やしたとする。同様に、次から次へと羊を増やし続け、100頭、1000頭と各自が増やしたとする。論点はこうである。羊を増やした場合、直接の利益は、農夫にもたらされるが、負荷は、全体に振り分けられ、その結果、一匹あたりの成長は餌不足で遅くなるにしても、やはり個人の利益は増大する。しかし、協約もなく、ただ競争が激化してゆくと、共有地の負荷は増大し、放牧が困難になるほどになる。管理を欠いた、直接的で、短期的な利潤の追求競争は、結果的に、持続不能の状態を生む。

この例は、環境問題の現状をうまく描いている。生産物の生産は、生産者に直接的で短期的な利益を与えるが、その負荷は、全人類が、長期にわたって負担することになる。

しかし、一企業だけが、環境問題を憂慮して、自分だけでそれを避ける方策を取ったとする。すると、それに伴うコストが生産費に跳ね返り、おそらくその企業は、何もしない企業との市場競争に敗れる結果になるださろう。

先進国においては、生産者に社会的責任を負わせる法がある程度施行されている。しかし、グローバリゼーションの結果、企業は、環境基準の最も弱い地域にその生産拠点を簡単に移動することが出来る。環境問題は、しかし、温暖化に見られるごとく、国境を越えた、地球規模における事態である。

統一社会倫理学は、短期的な利潤追求と、長期的な持続可能性のバランスをとり、公正な既成のメカニズムを提示しうる社会理論を展開する必要に迫られている。

III. 弱者にのしかかる軋轢（あつれき）

社会問題の最も重い重圧、軋轢はえてして弱者にのしかかる。代弁するものもない声なき者、つまり自然、貧困層、女性と子供、社会的弱者は、その軋轢から逃れるすべもなく、放置されがちである。とりわけ、貧困の問題を取り上げる。

貧困は複雑な問題である。貧困は、飲み水、下水、交通を含むインフラの欠如、医療、栄養、食料、教育、雇用、その他の生存に必要な事項の不足、欠如を含んでいる。極貧は、一日あたりの収入が1ドル以下（現地の通貨価値に換算した上で）と定義され、約10億人（世界人口の19%）が、それにあたる。貧困は、一日あたりの収入、2ドル以下と定義され、約27億人（世界人口の48%）がそれ

にあたる。43億人（世界人口の75%）が、一日10ドル以下で暮らし、54億人（95%）が、アメリカの貧困基準である49ドル以下で暮らしている。富の分配は更に不均衡で、2%の富裕層が、全世界の富の50%以上を所有し、最底辺から50%の人が、逆に1%の富を分け合っている。

かかる極端な貧富の差、貧困の事実は正当化しえない。貧困でまた父権主義の強い社会の中で、女性はことに脆弱な立場にある。教育は受けられず、経済的に男性に依存せざるを得ない仕組みが作られていることが多い。病気、死、離婚で、依存していた夫を失った女性はことに困難な立場に追い込まれる。更に、男児を重視する社会であるため、女性は、男児を産むまで（得てして、最低二人の男児を生むまで。二人目の男児は、長男が死んだときのバックアップ）子供を産み続けることを強要される。男児を出産しない女性は、虐待の対象となる。貧困国家における人口増加には、かかる父権主義的文化が深く介在している場合が多い。

先進国においては、女性は教育、雇用において、ほぼ同等、あるいはそれに近い機会を得られる仕組みがある。女性は、経済的に自立も可能で、男児、女児への選り好みも比較的希薄である。女性は、婚期が遅く、社会的活動に取り組み、子供も少ない数で満足する傾向にある。先進国における、人口の安定あるいは減少には、女性の社会的役割と、文化的なあり方が深く関わっている。

3. 統一思想の社会倫理への観点

統一思想の社会倫理学を構築するに当たり、以下の諸点が概念的なベースとして考えられる。

1) 性相と形状の二性性相の存在論から、統一思想は靈性（宗教的、道徳的価値）と物質性（経済的、科学技術的合理性）のバランスの取れた社会を目指し、社会構成員の道徳性の涵養と、社会システムの再構築を考える。

2) 世界における公共領域の確保、世界的法体系の確立と、法の執行システムを含む公正な統治機構の確立を目指す。腐敗と、権力の乱用を防止するために、統治の透明性を高めることを重視する。

3) 宗教的伝統概念、市民運動等が掲げてきた公正、利他主義、博愛を認識し、かつ普遍的概念が地域や文化の特殊性に応じてどう適用されるか試みる。「公正としての正義」（ロールズ）に近い政治的正義を目指す。

4) 統一思想の責任概念は、個人、家庭、氏族、民族、国家、世界、先祖、子孫を含む、多層に渡る、個人と共同体の責任論と、過去現在未来に渡る歴史的、未来的責任論を含む。

5) 国民国家、人種、各種共同体を超えた市民社会概念を提示する。統一思想の歴史論は、諸宗教の営みを、神が平和と正義の世界、人類一家族世界を目指して導いてきた、摂理歴史の一環であると捉える。

6) 社会的、文化的、宗教的、歴史的多様性とその固有の価値を重視し、普遍的価値の多様化を試みる。文化的相対主義を拒絶するが、多様性と個別性の価値を重視する。グローバリゼーションは、かかる多様性と個別性との調和を図るよう調整の必要がある。

7) 家庭を社会の道徳的基本単位と考え、家庭において、人は父母の愛、夫婦の愛、子女の愛、兄弟姉妹の愛を身につけ、それを社会に援用するものとする。

統一思想の社会倫理は、それ自体が、理論的一貫性を持つと共に、正義論と社会倫理がどのように家庭倫理とかみ合うのか、考究する必要がある。その上で、上記の課題に答えてゆく必要がある。

結論

世界における正義の問題は複雑である。貧困、人口増加、環境、人権、女性、子供のそれぞれの問題には、社会、文化、経済、法、宗教、倫理、科学技術、歴史の問題が複雑に絡み合っている。正義論は、問題の多岐性をふまえた上で、公正で、バランスの取れた、効果的な視点を生み出してゆく必要がある。

統一思想の正義論には、少なくとも三つの課題がある。第一に、今日のグローバル社会の状況を踏まえること。第二に、統一思想に含まれている多様な観点を論理的整合性のあるものにまとめ上げること。第三に、まとめられた社会倫理に、家庭倫理がどのように組み合わせられているのか解明すること。

20世紀を代表する倫理学者の一人、ピーター・シンガーが指摘しているように、「単一の世界共同体の時代を迎えるための倫理的基礎を、我々は創って行かねばならない」であろう。

注の日本語訳省略 英語原本を参照のこと。

参考文献の内、日本語がある著作。

ジョセフ・E・スティルグリッツ 『世界に格差をバラ蒔いたグローバリズムを正す』 徳間書店 2006年

ジョン・ロールズ 『公正としての正義 再説』 岩波書店 2004年

ピーター・シンガー 『グローバリゼーションの倫理学』 昭和堂 2005年

トーマス・フリードマン 『フラット化する世界』 上・下 日本経済新聞社
2006年